



森 そよ花 (もり そよか) 東京純心女子中 3年生

作品名:永遠の出口の先に

図 書:永遠の出口

「永遠の、限りないものに憧れる。でも、限りあるものほど、いとおしく思える。」

「永遠に。」という言葉聞き、歯を食いしばり、取り返しのつかない口スをしてしまったような焦燥と闘い、結局は敗れて、もはや永遠に出会うことのないもののために泣いた。そんな紀子の気持ちが、私にはよく分かる。

私の中学校では、毎年、学年の最後の行事として合唱コンクールが催され、全学年クラスごとに、課題曲と自由曲を発表する。私は昨年度、こともあろうに、コンクール前日にインフルエンザを発症し、本番を欠席するという悲劇に見舞われた。何日も何日も一生懸命に練習してきただけに、押えようのない悔しさでいっぱいになった。夕方、友達から、「賞は獲れなかったけれど、今までで一番上手に歌えたから悔いはないよ。」と報告されたことは、せめてもの救いだった。でも、私はこのクラスの仲間と合唱コンクールに出場し、観客席から注目を浴びながら舞台上に立ち歌うことも、賞が獲れない悔しさを、泣きながらなくさめ合うことも永遠にないのだと思ったら、涙があとからあとからこぼれ落ちた。ただ合唱コンクールに出場できなかった悔しさだけではなかった。それは私にとって、はかりしれない多くのものを失ってしまったにちがいない出来事だった。

毎日いろいろな経験をし、成長していく紀子は、大きな壁に何度もぶつかり、乗り越え、少しずつ大人になっていった。普通に起こる日常の不安や問題に、傷ついたり、家族や友達と支え合いながら向かい合う紀子を見ていたら、頑張ろう、そう元気が出てきた。

紀子と友達のクー子と春子の三人で小学校の卒業旅行へ行く話が一番好きだ。なぜなら、三人で好きな人の話や、お互いの不安を話したり、小さなことで盛り上がる姿を見て、とても懐かしい気持ちでいっぱいになったからである。きっと、私が小学校を卒業した後とよく似ているからだと思う。卒業後、私立中学に通う私と、公立中学に通う親友。今まで六年間かた時も離れることがなかったのに、違う学校へ行くなんて、想像すらできなかったし、心細くもあり、言いようのないさみしさがこみあげてくることを、今でもはっきりと覚えている。そして、小学生でも中学生でもない春休みは、新鮮でありながらも、未来への不安ととなり合わせでもあった。楽しかった思い出が、よけいに切なくもあった。私達は、卒業旅行には行かなかったけれど、今まで毎日通り慣れた通学路を歩きながら、

「今、小学生と中学生の間なんだよね。」

「うん。今はまだ、バスの料金五十円かな？」

などと話していた。その頃の私達の気持ちは、まさに「春のあなぼこ」という章の題名そのものだった。小学校の卒業式は、私の心の中で、今までの思い出と、これからの不安や希望の間に、ぽっかりとあなをあけた。「さみしさ」というあなぼこを。

あの頃、やけに遠く感じた東京も、今ではうそのように気楽に友達と遊びに行ける。怖くてしかたのなかった花火の音だって、今はもうへっちゃらだ。大人になると、分からない事、知らない事も怖い事も、どんどんなくなって、退屈してしまいそうだけれど、だからこそ日常生活に転がっている、ほんの小さな事にも興味を持ちたい。どんなに歳を重ねても、今この胸に描いている、あふれるほどの夢を忘れずに生きていきたい。

「永遠なんてあるのだろうか？」と、この物語を読み終えた時、ふと考えた。大きくて明るくて温かい太陽でさえ、五十億年後には、水星、金星やこの地球さえも飲み込み、宇宙の塵となってしまふ。そう書いてあるのを読んで、私の人生も永遠であるわけではないし、この、毎日忙しいけれど充実している中学校生活も永遠ではないのだと改めてそう思った。「では、私には何ができるだろうか？」もし永遠にあるものが無いのだとしたら、今この時を一生懸命楽しく生きて、目の前にあるすべてのことを、めいっぱい楽しみたい。「永遠の限りないものに憧れる。でも、限りあるものほど、いとおしく思える。」物語の最後をしめくくるこのメッセージに、胸をつかれた。今、私の過ごす一瞬一瞬を、ぎゅっと抱きしめたい気持ちにかられた。